11　注文に時間がかかるカフェ（障がい者）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、福田愛依がお届けします。今日のタイトルは「注文に時間がかかるカフェ」です。

言葉がスムーズに出てこない「吃音」という障がいのある人たちがいます。初めの音を繰り返す、音が伸びる、間が空く、など症状や程度はさまざまで、全国におよそ１２０万人いるといわれています。

そんな吃音がある若者がスタッフとなり、各地で開催されている一日限定のカフェがあります。それは「注文に時間がかかるカフェ」。注文を取るときに言葉がうまく出ず時間がかかりますが、お客さんは笑顔で見守り、ゆっくりと会話を楽しんでいます。

発起人は、小学生の頃から吃音に悩んできた奥村安莉沙さん。「近づいたら話し方がうつる」と噂されて避けられたり、からかわれたり、つらい経験をしてきました。

【奥村さん役】自分が情けなくて、気持ちが沈んで自信をなくしていきました。カフェで働きたいという夢も諦めていま

した。

背中を押してくれたのは、異文化に触れようと留学したオーストラリアでの出会いです。障がい者やさまざまな国の人がスタッフをしているカフェで私も一緒に働きました。そこで、流暢に話せなくてもみんなジェスチャーで楽しそうに接客する姿を見て、吃音があると接客は難しいという先入観が吹き飛んだのです。

（ナレーター）吃音があっても接客業を希望する若者は多くいます。「注文に時間がかかるカフェ」は、彼らが願いを叶え、自分の夢を見つけられる場所です。福岡県でのカフェに参加した木村りこさんは次のように話します。

【木村さん役】カフェには「いらっしゃいませ」を言うなど決まった接客のルールがなく、最初はどのように声をかけていいのか戸惑いました。他のスタッフも緊張していましたが、吃音を理解したいというお客様の温かい雰囲気に徐々に積極的になっていきました。そんな様子を見て勇気をもらい、私の中に残っていた吃音に対する恥ずかしさがなくなりました。

【奥村さん役】カフェに参加した人同士の新たな交流も生まれています。この経験を通じて自信を持てるようになり、自分の望む道に進むことができる若者が増えるとうれしいです。

吃音（きつおん）という障（しょう）がいがあっても、やりたいことを諦（あきら）めなくていい社会（しゃかい）になっていけたらいいなと思（おも）います。

（本文９３１字）